

Isabelle Cheatsheet (2016-1)

定理・定義

`<theory> ::=`

- **theorem** `theorem_name:`
`fixes x_1 :: "type 1" and ... and x_l :: "type l"`
`assumes ass_name_1: "ass 1" and ... and ass_name_m: "ass m"`
`shows sub_name_1: "claim 1" and ... and sub_name_n: "claim n"`
`<proof>`

定理を言明. 証明後は各 $i = 1 \dots n$ について命題

$$\bigwedge x_1 \dots x_l. \text{ass } 1 \implies \dots \implies \text{ass } m \implies \text{claim } i$$

(ただし, 最外の \wedge で束縛された変数 x_j は, 常に schematic variable `?x_j` に置き換えられる) が事実 (fact) となり, `sub_name_i` または `theorem_name(i)` と名前が付く. 名前はどちらも省略可だが事実上どちらかは必要.

証明のゴールは `"claim 1" ... "claim n"` (唯一の場合 `?thesis` でも表される). 証明中のみ `"ass i"` が fact となり `ass_name_i` または `assms(i)` と名前が付く.

`fixes` は省略可. 自由変数は \wedge で束縛されているものとみなされる.

- 同義語: **lemma** = **proposition** = **corollary** = **theorem**
- **definition** `f :: "type" where def_name: "f x_1 ... x_n \equiv right"`

非再帰的定義. 定理の言明同様, 自由変数 x_i は \wedge で束縛されているものとみなされる.

$$\bigwedge x_1 \dots x_n. f x_1 \dots x_n \equiv \text{right}$$

が fact となり, `def_name` (省略した場合は `f_def`) と名前が付き, `[code]` 属性が与えられる.

- **abbreviation** `f :: "type" where "f x_1 ... x_n \equiv right"`

略記を定義. **definition** と違い定義を展開する必要がない.

- **fun** `f :: "type"`
`where name_1: "left_1 = right_1"`
`| ...`
`| name_n: "left_n = right_n"`

関数の再帰的定義. `left_i` は根記号 `f` のパターン. 等式 `"left_i = right_i"` (の自由変数を \wedge で束縛した命題) が fact となり, `name_i` または `f.simps(i)` と名前が付き, `[simp, code]` 属性が与えられる. マッチするパターンに関する場合わけ規則は `f.cases`, 定義に関する帰納法スキームは `f.induct`. パターンの網羅性, 停止性が自動で証明される.

- **fun** `f_1 :: "type 1" and ... and f_n :: "type n"`
`where name_1: "left_1 = right_1"`
`| ...`
`| name_m: "left_m = right_m"`

相互再帰的関数定義. 自動で生成される fact は `f_1...f_n.simps` 等となる.

- **function** `f :: "type"`
`where name_1: "left_1 = right_1"`
`| ...`
`| name_n: "left_n = right_n"`

`<proof>`

termination `<proof>`

... **fun** で自動証明ができない場合に使用. 1つ目の証明はパターン網羅性, 2つ目の証明は停止性. ほとんどの場合1つ目は `pat_completeness` メソッド, 2つ目は `(relation "expression")` メソッドで始める. `"expression"` は `f` の引数を比較する well-founded な二項関係 (対の集合) を与える.

- **datatype** ('a1, ..., 'an) t =
`Const_1 (type)* | ... | Const_n (type)*` 再帰的データ型の宣言. 場合分け規則 `t.cases` や, 構造帰納法スキーム `t.induct` などの `fact` が作られる.
- **declare** <fact> [*attr*]*
 既知の `fact` の属性を変更.

補助コマンド

- **thm** <fact>+ ... `fact` を表示
- **find_theorems** <pattern> ... パターンにマッチする `fact` を検索
- **print_theorems** ... 直前のコマンドで作られた `fact` を表示

ロケール, クラス

- **context**
`fixes x_1 :: "type 1" and ... and x_n :: "type n"`
`assumes name_1: "ass 1" and ... and name_m: "ass m"`
`begin (theory)* end` ブロック単位で仮定や変数を宣言. 内部で "claim" として得た `fact` は, 外部から参照すると

$$\bigwedge x_1 \dots x_n. \text{ass } 1 \implies \dots \implies \text{ass } m \implies \text{claim}$$

となる. 外部に見せたくない補題は `private lemma` などと記述する.

- **locale** locale_name = <locale expression> +
`fixes x_1 :: "type 1" and ... and x_n :: "type n"`
`assumes name_1: "ass 1" and ... and name_m: "ass m"`
`begin (theory)* end` ロケールを定義. **context** に近いが, 内部で `fact_name` として得た `fact` は外部から `locale_name.fact_name` で参照可. <locale expression> で親ロケールを指定可. 仮定が満たされる条件が述語 `locale_name` として定義される.
- **class** class_name = <class expression> +
`fixes x_1 :: "type 1" and ... and x_n :: "type n"`
`assumes name_1: "ass 1" and ... and name_m: "ass m"`
`begin (theory)* end` クラスを定義. 構文はロケールと近いが, 型変数は 'a のみが許される. 内部で `fact_name` として得た `fact` は, 'a にクラスが制限された形 ('a :: class_name) でグローバルに `fact_name` として参照可.
- **interpretation** label: locale_name "arg 1" ... "arg n"
`rewrites name_1: "l_1 = r_1" and ... and name_m: "l_m = r_m"`
`<proof>`

ロケールの前提を満たす引数を指定し, ロケールを解釈. 証明のゴールは

$$\text{"locale_name (arg 1) } \dots \text{ (arg n)"}"$$

通常 `unfold_locales` メソッドを適用. 証明後は `locale_name` 中 `name` で参照される `fact` や定数が `label.name` で参照可. 名前の衝突がない場合 `label:` は省略化.

- **sublocale** label: locale_name "arg 1" ... "arg n" <proof>
interpretation とほぼ同じだが, `end` 以降も関係が維持される.
- **subclass** class_name <proof>
 現在のクラスが `class_name` のサブクラスであることを言明.

- **instance** `t :: (class_1, ..., class_n) class_name <proof>`
各型 `'ai` がクラス `classi` に含まれるとき、データ型 `('a1, ..., 'an) t` がクラス `class_name` に含まれることを言明. 証明のゴールは

```
"OFCLASS(('a1, ..., 'an) t, class_name)"
```

通常 `intro_classes` メソッドを適用.

- **instantiation** `t :: (class_1, ..., class_n) class_name`
`begin`
 `<theory>*`
 instance `<proof>`
`end`

instance と同様だが定義が必要な場合に使用.

- **context** `name begin <theory>* end`
定義済みのロケール, クラスに言明を追加.
- 同義語: **theorem** `(in name) ... =`
context `name begin theorem ... end`
同様の記法が **definition**, **subclass** などにも適用可.

補助コマンド

- **class_deps** `<class>? <class>? ...` クラスの依存関係をグラフ化

証明

`<proof> ::=`

- **by** `<method>`
証明メソッドを適用してゴールをすべて discharge.
- **apply** `<method> <proof>`
証明メソッドを適用してゴールを変形または discharge.
- **proof** `<method> <isar>* qed <method>?`
まず1つ目の証明メソッドを適用 (何もしない場合 **proof-**), 残ったゴールを `<isar>*` (後述) で discharge, さらに残ったゴールを最後の証明メソッドで discharge.

同義語

- `.` = **by** `assumption`
- `..` = **by** `standard`
- **done** = **by-**
- **using** `<fact>+ ≃ apply (insert <fact>+)`
- **unfolding** `<fact>+ ≃ apply (unfold <fact>+)`
前者は書換え規則が1つも適用出来なくてもエラーにならないため (Isabelle 2016-1 現在), 保守性に難.
- **proof** `<isar>* = proof standard <isar>*`
- **by** `<method> <method> = proof <method> qed <method>`
内部的には **by** `<method>` は **proof** `<method>` **qed** であることによる.
apply `<method>` **by** `<method>` や **by** `(<method>, <method>)` を使えばよい.

Isar

$\langle isar \rangle ::=$

- **have** name_1: "claim 1" and ... and name_n: "claim n" $\langle proof \rangle$
"claim i" を証明し name_i という名前を付ける.
- **show** name_1: "claim 1" and ... and name_n: "claim n" $\langle proof \rangle$
have と同様だがゴール (のうち n 個) を証明して discharge.
- **note** name [$\langle attr \rangle^+$] = $\langle fact \rangle^+$
既知の fact を言明.
- **assume** name_1: "ass 1" and ... and name_n: "ass n"
"ass i" を仮定し name_i という名前を付ける. 以下の形のゴールの証明に使用.
$$\text{"ass 1} \implies \dots \text{ass n} \implies \text{claim"}$$
- **fix** x_1 :: "type 1" and ... and x_n :: "type n"
x_i を, 型 "type i" の任意の値とする. 以下の形のゴールの証明に使用.
$$\text{"}\bigwedge x_1 \dots x_n. \text{claim"}$$
- **define** f :: "type" where name: "f x_1 ... x_n \equiv right"
証明中でのみ有効な **definition**.
- **interpret** locale_name "arg 1" ... "arg n" $\langle proof \rangle$
証明中でのみ有効な **interpretation**.
- **obtain** x_1 :: "type 1" and ... and x_n :: "type n"
where name_1: "claim 1" and ... and name_m: "claim m"
 $\langle proof \rangle$
"claim 1" ... "claim m" を満たす x_1 ... x_n が存在することを証明し, 以降の証明で利用.
- **case** name: (Case_Name x_1 ... x_n)
場合分け・帰納法中, Case_Name と名付けられたケースを考える. 場合分けを表す仮定, 帰納法の仮定が name (省略した場合 Case_Name) で参照可.
- **next**
これまでに証明・仮定した fact などすべてリセット. 前提の異なるゴールの証明, 別の場合分けに移る際に使用.
- { $\langle isar \rangle^+$ }
ローカルスコープ. スコープ最後の言明に, スコープ内で **assume** した仮定を前提とし, **fix** した変数を \wedge で束縛をした命題を **have** で示したのと同じ.
- **let** ?v = "expression"
メタ変数 ?v を定義.
- $\langle isar \rangle$ **also** ... **also** $\langle isar \rangle$ **finally** $\langle isar \rangle$
推移性を持つ関係や等式を並べてひとつの結論にまとめる. 直前の言明の右辺を表す "... " が便利. $>$, \geq などは左右が逆になるので注意. 使用例:

```
assume "f x = a + b"  
also have "...  $\leq$  c"  $\langle proof \rangle$   
also have "... + d < e"  $\langle proof \rangle$   
finally have "f x + d < e".
```
- $\langle isar \rangle$ **moreover** ... **moreover** $\langle isar \rangle$ **ultimately** $\langle isar \rangle$
複数の言明をまとめて最後の言明の前提に加える.

同義語

- **from** $\langle fact \rangle^+$ **have** ... $\langle proof \rangle$ = **have** ... **using** $\langle fact \rangle^+$ $\langle proof \rangle$
ただし前者のみ，直前の言明を **this** として参照できる.
- **then** = **from this**
- **with** $\langle fact \rangle^+$ = **from this** $\langle fact \rangle^+$
- **hence** = **then have**
使うメリットは少ない.
- **thus** = **then show**
使うメリットは少ない.

証明メソッド

$\langle method \rangle ::=$

非自動的，堅牢

- **rule** $\langle fact \rangle^+$
1 つ目のゴールの結論を $fact$ (のうち，適用可能などれか) の結論として導く. 適用された $fact$ の前提が新たなゴールに加わる.
- **fact** $\langle fact \rangle^+$
1 つ目のゴールを $fact$ (のうち，適用可能などれか) から直接導いて discharge.
- **insert** $\langle fact \rangle^+$
すべてのゴールの前提に既知の $fact$ を加える.
- **assumption**
1 つ目のゴールの結論を前提から直接導いて discharge.
- **intro** $\langle fact \rangle^+$
適用できる限り (**rule** $\langle fact \rangle^+$) を適用 (1 回も適用できなければ失敗).
- **elim** $\langle fact \rangle^+$
適用できる限り除去規則を適用 (1 回も適用できなければ失敗).
- **cases** "expression"
"expression" のデータ構造に応じた場合分け.
- **cases** "expression 1" ... "expression n" **rule:** $\langle fact \rangle$
場合分け規則を指定した場合分け.
- **induct** x **arbitrary:** $y_1 \dots y_n$ **rule:** $\langle fact \rangle$
変数 x に関する帰納法を適用. 帰納法の仮定において， $y_1 \dots y_n$ は任意となる. **rule:** を省略すれば構造帰納法.
帰納法内では元の x は無関係となるため， x に関する必要な $fact$ は事前に **insert** で前提に含めてから **induct** を適用する.

- `subst (abs)? (n ...) <fact>`

現在のゴールに書換え規則を強制適用。与えられた `fact` は

```
"ass 1 => ... => ass m => left = right"
```

の形であり、ゴールの結論中 `left` にマッチする `n` 番目の式を `right` の形に書き換える。"`ass 1`" ... "`ass m`" が新たなゴールに加わる。

- `unfold <fact>+`
現在のゴールに 1 回以上、適用できる限り書換え規則を適用。
- `fold <fact>+`
`unfold` の逆 (ただし、なぜかより保守的)。
- `atomize (full)`
すべてのゴールを 1 つの HOL レベルの論理式にまとめる。複数のゴールに帰納法などを適用する場合に便利。

自動的

- `simp [{add | del | only}: <fact>+]*`
現在のゴールに、`[simp]` 属性の与えられた `fact` を書換え規則として適用できる限り適用 (+黒魔術)。パラメータ `add: <fact>+`, `del: <fact>+` で書換え規則を制御可能。
- `simp_all [{add | del | only}: <fact>+]*`
すべてのゴールに `simp` を適用。
- `auto [{simp [del] | [intro[!]| elim[!]| dest[!]| rule del}: <fact>+]*`
すべてのゴールに登録済みの書換え規則、導入規則、除去規則 (+黒魔術) を適用。パラメータ `simp: <fact>+`, `intro: <fact>+`, 等で規則を制御可能。
- `force, fast, fastforce, blast, meson, metis`
1 つ目のゴールを自動証明 (証明できなければ失敗)。 `sledgehammer` 等が見つめてきた場合のみ使い分ければよい。
- `linarith, arith, presburger`
1 つ目のゴールに算術系に強い自動証明を適用。同上。
- `rule`
現在のゴールに“標準”の導出規則を 1 回適用。メンテナンス上、適用される規則を明示する方がお勧め。
- `standard`
現在のゴールに“標準”の証明メソッドを適用。同上。

合成

- `<(method)>`
`<method>` が単語でない場合に `by <(method)>` などの形で必要。
- `<method>, <method>`
`<method>` を順に適用。
- `<method>; <method>`
1 つ目の `<method>` を適用して生成されたゴールすべてに 2 つ目の `<method>` を適用。
- `<method>? / <method>* / <method>+`
`<method>` を 1 回以下 / 0 回以上 / 1 回以上適用。何回適用する意図なのか分からないため、保守性が非常に悪い。

属性

`name: "claim"` の形の言明は `name [⟨attr⟩+]: "claim"` として属性を指定可.

`⟨attr⟩ ::=`

- `simp [del]`

書換え規則. 証明メソッド `simp` や `auto` で使用される. 基本的に, 等式 " $\wedge x_1 \dots x_n. \text{left} = \text{right}$ " の形の `fact` に使用. 停止性に注意.

- `intro[!|?]`

導入規則. 基本形は, `my_pred` を述語として,

```
lemma my_predI [intro]:  
  assumes "ass 1" and ... and "ass n"  
  shows "my_pred x_1 ... x_m"
```

x_i は変数でなくともよいが, 結論を出来るだけマッチしやすい形にするのが望ましい. 証明メソッド (`intro my_predI`) はゴールが

$$"\dots \implies \text{my_pred } x_1 \dots x_m"$$

にマッチする場合に適用でき, 以下の n 個のゴールに置き換えられる.

$$\begin{array}{c} \dots \implies \text{ass } 1 \\ \vdots \\ \dots \implies \text{ass } n \end{array}$$

`intro!` を指定した規則は `auto` 等で非可逆的に適用される.

- `elim[!|?]`

除去規則. 基本形は, `my_pred` を述語として,

```
lemma my_predE [elim]:  
  assumes "my_pred x_1 ... x_m"  
  and "ass 1 1  $\implies$  ...  $\implies$  ass 1  $n_1 \implies$  P"  
  and ...  
  and "ass  $\ell$  1  $\implies$  ...  $\implies$  ass  $\ell$   $n_\ell \implies$  P"  
  shows "P"
```

ただし P は変数. x_i は変数でなくともよいが, 最初の前提を出来るだけマッチしやすい形にするのが望ましい. `!/?` については `intro` と同様.

証明メソッド (`elim my_predE`) はゴールが

$$"\dots \implies \text{my_pred } x_1 \dots x_m \implies \text{claim}"$$

にマッチする場合に適用でき, 以下の ℓ 個のゴールに置き換わる.

$$\begin{array}{c} \dots \implies \text{ass } 1 \ 1 \implies \dots \implies \text{ass } 1 \ n_1 \implies \text{claim} \\ \vdots \\ \dots \implies \text{ass } \ell \ 1 \implies \dots \implies \text{ass } \ell \ n_\ell \implies \text{claim} \end{array}$$

- `dest[!|?]`

用途は `elim` と近く, ひとつしか仮定がない場合に以下の形で使用.

```
lemma my_predD [dest]:
  assumes "my_pred x_1 ... x_m"
  shows "cond"
```

証明メソッド (`elim my_predD`) はゴールが

$$"... \implies \text{my_pred } x_1 \dots x_m \implies \text{claim}"$$

にマッチする場合に適用でき、以下のゴールに置き換わる。

$$"... \implies \text{cond} \implies \text{claim}"$$

- **trans**

一般的な推移規則を宣言。たとえば

$$"\bigwedge a b c. a < b \implies b \leq c \implies a < c"$$

also による証明で利用される。

- **symm**

関係の対称性を宣言。" $\bigwedge a b. f a b \implies f b a$ " の形の `fact` に指定する。[`symmetric`] 変形で利用される。

- **code**

プログラムに変換される等式を指定する。仮定を持つコンテキストやロケール内で定義した関数は、コンテキスト外で [`code`] 宣言する必要がある (Isabelle 2016-1)。

- **code_unfold**

プログラム変換を行う前処理として適用する書換え規則を指定。

- **unfolded** $\langle fact \rangle^+$

参照中の `fact` に書換えを適用した結果を表す。

- **folded** $\langle fact \rangle^+$

`unfolded` の逆。

- **simplified**

参照中の `fact` に [`simp`] 属性の書換え規則を適用した結果を表す。

- **symmetric**

`fact_name` の結論が等式のとき、`fact_name[symmetric]` は等式の左辺と右辺を交換したもの。

- **OF** `fact_1 ... fact_n`

参照中の `fact` が " $\text{ass } 1 \implies \dots \text{ass } n \implies \text{claim}$ " の形のとき、各 `fact_i` が表す `fact` を "`ass i`" にマッチさせた結果の "`claim`" を表す。参照中の `fact` の形に依存するため、可変性に難が出る。

- **of** "`expr 1`" ... "`expr n`"

参照中の `fact` 中の schematic 変数を、順に "`expr i`" で置き換えた結果を表す。同上。

Isabelle/jEdit ショートカット

Ctrl-b	completion ヒント. tab で決定
Ctrl-e ↓	subscript
Ctrl-e ↑	superscript
==>	\implies
!!	\wedge
=>	\Rightarrow
-->	\longrightarrow
~	\neg
\noteq	\neq
>=	\geq
<=	\leq
->	\rightarrow
.>	種々の左矢印
<.	種々の右矢印
\forall	\forall
\exists	\exists